小学校における英語絵本の読み聞かせ

福田 泰久

はじめに

2017 年（平成 29 年）3 月に告示された小学校学習指導要領では大きく 2 つの改訂が行われた。1 点目は中学年に外国語活動を前倒しし、「聞くこと」と「話すこと（やり取り・発表）」を中心とした活動によって外国語に慣れ親しみ、外国語学習への動機づけを高めること、2 点目は高学年では外国語科として教科化し、「読むこと」と「書くこと」を加えてより系統的な学習を行うことで、小中の接続を図ることが重視されたことである。中学年の外国語活動と高学年の外国語の目標はそれぞれ以下のように設定されている。

外国語活動

（1）外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。

（2）身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。

（3）外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。　　（文部科学省 13-15）

外国語

（1）外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解す

るとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。

（2）コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。

（3）外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。　　（文部科学省 69-72）

併せて「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」（2017）の理論編には、マイケル・ロングのインタラクション仮説等の第二言語習得論を踏まえた、「やり取り」の重要性が指摘されている。すなわち、アウトプットの産出過程における模倣、類推、訂正等の学習者と指導者との相互交流こそが、第二言語習得を促すという仮説である。この仮説に基づいて、同ガイドブックでは外国語活動や外国語科を構築する際に常に意識すべき知見として、以下の 5 つを挙げている。

・音声中心に聞くことから始めて、話すことへ進めていく
・よりよいコミュニケーション活動のために、聞く時間を確保する
・音声に十分慣れ親しんだ後に、読んだり、書いたりする活動を行う
・単なる機械的な繰り返しではなく、意味・必然性のある表現を様々な活動を通して繰り返し触れさせる
・児童の実態を調査し、児童の意欲を高めるための方策を考える

「音声中心に聞くことから始め」るとあるように、アウトプットのためにはインプットから始める必要があるが、当然、児童の発達段階に応じた適切なインプットが求められる。人は理解可能なインプット（それも、現在の能

力レベルからわずかに高いレベルの理解可能なインプットである i [imput]＋1）を受けることで言語を習得する（2）とするスティーヴン・クラッシェンの仮説はその曖昧さから批判されることも多いが、既知の事項を繰り返しても新たなインプットにはつながらず、逆に能力を大幅に超えたインプットを与えても意味解釈の過程は生じず、言語習得を促進するものでないとすれば、仮説の全体的な意義まで否定されるものではないだろう。松本（2020）は村野井（2006）を援用しながら、上で見た理解可能な適正なインプットと学習者と指導者のやり取りに、児童の興味に適う「関連性」、本物の英語であることを示す「真正性」、そして「音と文字のインプット」であることの 3 つを加え、これら 5 つの条件がそろったときに第二言語習得が促進されるとしている。

ガイドブックに示された 5 つの知見を踏まえながら、学習指導要領に明記された目標を達成するために充当される授業時数は、外国語活動が 3、4 年生の 2 年間で 70 単位時間（週 1 時間実施）、外国語が 5、6 年生の 2 年間で 140 単位時間（週 2 時間実施）となる。授業時間数の多寡はさておき、こうした制約のなか、真正性を満たしつつ、児童の興味関心に適い、音と文字のインプットを兼ね備えた教材として英語絵本が取り沙汰されるのは至極当然の流れだろう。そこで本稿では、教材としての英語絵本に着目し、先行研究を踏まえてその効用を指摘する。

1　先行研究のレビュー

まず、小学生を対象とした教材としての英語絵本に関する先行研究を概観する。先行研究を大別すると、1 つは英語絵本の選定基準に関するもの [1] と、もう 1 つは実践研究に関するもの [2] にわけることができる。このうち後者については、重複するところはあるものの、実際に児童に英語絵本を読み聞かせすることでどのような効果が得られたかに関する実践報告と、読み聞かせの方法論及び英語絵本の活用方法に関する報告・提案にわけることができる。以下、それぞれ主となる先行研究を取り上げつつ、その他の先行研究の知見も踏まえながら概観する。

1. 1　英語絵本の選定基準

英語絵本の選定基準については、松本（2017b）を取り上げる。「絵本の読み聞かせが成功するためには（…）読み聞かせの技術が 1 割から 2 割、残り 8 割から 9 割は絵本が重要な役割を果たす」（7）と述べる松本は、文部科学省が開発した 3 年生用補助教材 *In the Autumn Forest* と 4 年生用補助教材 *Good Morning* の分析を通して、以下の 10 点に及ぶ英語絵本の選定条件を示した。

①絵本の長さ　②英語が平易であること　③英語に特徴的な音声やリズムがあること　④絵本作品として優れていること　⑤遊びに要素があること　⑥他教科との融合をしやすいこと　⑦児童参加がしやすいこと　⑧物語構造が以下のいずれであること（繰り返し構造・起承転結型（行きて帰りし物語））
⑨テーマを持つこと　⑩主人公、登場人物の設定が魅力的であること

松本は、このうち①～④までを英語活動では必ず満たしてほしい項目、⑤～⑦までを 1 つは満たしたい項目、⑧～⑩は今後の検討を要するものとしている。本稿では①～④までをレビューする。

①について、松本は集中力保持の点から 3, 4 年生には 32 ページ程度までの絵本を 6~8 分程度の時間的長さで読み聞かせを行うことを提案している。これに関して、小学校 3 年生～6 年生の指導経験のある 8 名の教師に対して、児童にふさわしい英語絵本を 10 点挙げるよう質問紙調査を行った長田（2020）の知見を付け加えよう。それによると、8 名中 3 名が選び、もっとも重複の多かった絵本は 1. *Brown Bear, Brown Bear, What Do You See?*（Bill Martin Jr. / Eric Carle）2. *Ketchup on Your Cornflakes?*（Nick Sharratt）3. *The Very Hungry Caterpillar?*（Eric Carle）4. *Today is Monday*（Eric Carle）5. *What Can You Do?*（Nakamoto Mikiko / Kakegawa Hideko）の 5 冊である。これらはいずれも 32 ページ（見開き 16 ページ）ほどの長さで、松本の示す条件に合致していることから、①にはある程度の蓋然性があると言っていいだろう。

②の英語の平易さについては、冒頭で述べた理解可能なインプットに関するものである。

③は冒頭で述べた真正性に関するものだが、これについては立場によって異論もある。Alex Gilmore のように英語ネイティブ話者が日常生活で用いる英語を「真正」とみなす論者もいれば、Henry G. Widdowson のように、非英語ネイティブ話者の学習過程において、教室内や教科書等で用いられる英語のように、限定された範囲で作られた、あるいは作り変えられた英語を「真正」とする論者もいるからだ。学習の到達目標と過程のどちらに重きを置くかの違いと言い換えても良い。一方で、学習指導要領が求める「標準的な発音」（170）という表現も極めて曖昧であり、World Englishes と複数形で表すことも多い昨今、「真正性」の定義については今後も課題となり続けるだろう。

④はコールデコット賞受賞作のようなものが想定されている。例として、松本は日本でも人気のある 1964 年受賞作 *Where the Wild Things Are*（Maurice Sendak）を挙げる。なお、この作品について松本は英語が平易である点も付け加えている（12）が、この点については後述したい。

1. 2　英語絵本を用いた実践報告

次に、実践報告及び英語絵本の活用方法等に関する先行研究を概観する。取り上げるのは吉村他（2017）と大川（2014）である。

他の多くの先行研究もそうだが、吉村他の研究も読み聞かせによる児童の情意変化に関するもので、A 小学校の 5 年生の学級担任が自身のクラスで計 7 回、そして B 小学校の 5 年生の学級担任が自分のクラスではない 3～6 年生の各クラスで同じく計 7 回、それぞれ半年間に渡り不定期に読み聞かせを行った結果を報告している。興味深いことに、英語絵本に興味が「あまりない」「全くない」と否定的に答えた A 小学校の児童の割合が、読み聞かせ前の 51%から読み聞かせ後には 70%と増加する結果が出たことである。その原因として、*Bark, George*（Jules Feiffer）のような動物絵本を多用し選定に偏りが出たことと、*From Head to Toe*（Eric Carle）のように、内容がシンプルで易しすぎたため 5 年生の発達段階にそぐわなかったこと等が指

摘されている。

その一方で、B 小学校の結果は、興味が「とてもある」「ある」と肯定的に答えた児童の割合が 65%から 92%へ大幅に増加し、「あまりない」「全くない」と否定的答えた児童の割合は 39%から 27%と微減した。B 小学校では従来朝の時間を利用して読み聞かせの活動を行っていたようだが、このことが結果に大きく影響しているようだ。全体として、上で確認したように、発達段階に応じたインプットの難易度の調節の重要性が改めて確認される結果となった。

これに関連して、松本（2017b）が先に挙げていた『かいじゅうたちのいるところ』について、木原（2018）の指摘を紹介しておく。光村図書出版の小学 2 年生用国語教科書に長らく採用されている *Swimmy*（Leo Lionni）とともに *Where the Wild Things Are* を引き合いに出しながら、木原はその英語の難解さを指摘している。例えば mischief、gnash、rumpus のような新 Jacet8000（2016）でもカバーしていない英単語、動名詞や比較級等の文法事項や複文が用いられるなど、英文自体の難易度はかなり高い。そもそも児童は大人の読み聞かせを聞きながら絵本の絵を見て楽しむ（藤本他, 12）ものであるため、児童がすべての英語を理解している必要はない。とはいえ、事前に難しい英単語等をカードにして黒板に掲示する等の準備はできるかも知れないが、それでも教師による読み聞かせの後に児童に繰り返しをさせる活動では困難を伴うことが容易に予想される。日本語でよく知られた絵本だからといって必ずしも教材としての適性がある訳ではないだろう。

先にも述べたように、先行研究の多くは英語絵本の読み聞かせと児童の情意変化との関係についてのものであるが、大川（2014）は英語絵本の読み聞かせによる英語力の伸長について報告をしている。[3] 対象は小学 2、4、6 年生で、1 週間に渡って低学年が *From Head to Toe*、中学年は *Who Ate All the Cookie Dough?*（Karen Beaumont）、高学年は *I Like ME!*（Nancy Carlson）を用いて、朝の活動時に 15 分間、計 4 回実施し、活動前後にリスニングとスピーキングのテストを行い、絵本の読み聞かせと英語力の伸長の相関性を調べている。リスニング（8 点満点）は本の中にある英文をいく

つか選び、選択式で英文と合致する日本文を選ばせるもので、スピーキング（15 点満点）は本の中にある英文を選び、絵本の絵と英文を提示しながら、教師が英文を発話した後に続けて同じ英文を発話させるものである。そして「正解語彙数」「発音（アクセント）」「流暢さ（リズム）」の 3 項目を 5 段階評価している。いずれの学年においても活動語の点数が活動前を上回る結果が出た（38）が、高学年の点数の伸びが他に比べて鈍かった。その原因を、意味を理解していないまま英語を発話したり、興味や意義を見いだせない英語活動や絵本活動を行ったりすることに対して不安感や抵抗感を抱いてしまう（39）ことにあるのではないかと、大川は指摘している。改めて英語絵本の選定の難しさが浮き彫りとなった結果といえるだろう。

1. 3　英語絵本の効果的な活用法

英語絵本の効果的な活用法については、リーパー・すみ子（2011）によって紹介された、非英語母語話者である小学生向けのリーディング指導法「ガイデッド・リーディング」を、多くの先行研究が参照している。「リード・アラウド」（読み聞かせ）に始まり、「コーラル・リーディング」（みんなでそろって読む）や「シェアード・リーディング」（ところどころで児童が参加）を挟み、「ペアード・リーディング」（2 人 1 組で読む）や「インディペンデント・リーディング」（1 人で全部読む）へとガイデッド（導く）方法論である。

例えば、畑江（2012）は小中接続を念頭に、学習段階や学習内容に合った絵本で、低学年では読み聞かせ、中学年では全員で読み合い、高学年では「音声・意味・文字」を同時に提示しながらなぞり読みをし、中学 1 年では教科書を音声と意味理解を伴った読み方で 1 人読みできるようにする指導法を提唱している。(11)

アレン玉井（2019）も述べるように、従来、英語絵本を用いた活動はインプットに重点が置かれ、アウトプットにつながらないことが多かった。この点で、上で紹介した畑江は、中学年では絵本の「内容を理解しながら感情のこもった英語で表現できる」こと、高学年では「音声・意味・文字を結び付け内容を理解しながら音読できる」ことをそれぞれ指導目標に掲げている。

児童による音読が単なる機械的な繰り返しとなる恐れはあるものの、その一方で、絵本の読み聞かせ後に聞いた音を真似て再現することは、音と意味のつながりに意識が向くだけでなく、そもそもスピーキングでは聞いた音を自分自身で発して再現してみることが重要であることを考えれば、こうした取り組みは有意義であるだけでなく、学習指導要領の定める目標にも適うものである。

2　先行研究のまとめ

小学生を対象とした英語絵本の読み聞かせに関する先行研究の概観を通して、1 つは英語絵本の選定基準に関するものと、もう 1 つは実践研究に関するものにわけることができることがわかった。このうち後者については、重複するところはあるものの、実際に児童に英語絵本を読み聞かせすることでどのような効果が得られたかに関する実践報告と、読み聞かせの方法論及び英語絵本の活用方法に関する報告・提案にわけることができることがわかった。

選定基準については、上で紹介した松本（2017b）による 10 の条件をなんらかの形で踏襲した先行研究が多く、また児童の発達段階に応じて絵本のレベルを調節する重要性を指摘するものが多かった。

読み聞かせの実践報告は主に児童の情意変化の報告であった。多くの先行研究が英語絵本の読み聞かせが児童の情意面にポジティブな影響を与えることを指摘しているが、上でも述べたように、児童の発達段階や興味関心に沿った絵本の選定が鍵となることも指摘されていた。

また、絵本の読み聞かせと英語力との相関についての先行研究の少なさは、2020 年から教科化が始まったことを考えれば致し方ない。上で紹介した大川（2014）の報告では、教師の後に続いて鸚鵡返しに英文を発話するテストで、絵本の読み聞かせ後には有意な伸長が見られた。だが、外国語の学習指導要領が「聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする」と目標に掲げる以上、今後、4 技能 5 領域の育成に資する英語絵本の読み聞かせの研究が求められることは間違いない。

3　外国語活動・外国語における英語絵本

それでは英語絵本を用いてどのような活動を行えば上記目標を達成することができるだろうか。具体的に学習指導要領では英語の目標を以下のように設定している。なお、ア、イ、ウの 3 つの目標を掲げている場合、アとイを踏まえた最も高い目標として設定されているウを以下に記す。

・聞くこと
ゆっくりはっきり話されれば、日常生活に関する身近で簡単な事柄について、短い話の概要を捉えることができるようにする。
・読むこと
活字体で書かれた文字を認識し、その読み方を発音できるようにする。
音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする。
・話すこと（やり取り）
自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について，簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして，伝え合うことができるようにする。
・話すこと（発表）
身近で簡単な事柄について，伝えようとする内容を整理した上で，自分の考えや気持ちなどを，簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。
・書くこと
大文字，小文字を活字体で書くことができるようにする。また，語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。
自分のことや身近で簡単な事柄について，例文を参考に，音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする。

順に検討しよう。まず聞くことであるが、大人が文字から情報を得るのに対して児童は文字ではなく絵から多くの情報を得る。そのため、理解できな

い英語があったとして絵で補うことが可能である。そのためには絵と内容が一致している必要があるため、絵本の選定の際には注意したいポイントになるだろう。その上で、例えば田中（2020）は *Froggy's Sleepover*（Jonathan London）の読み聞かせの際、絵本がカエルのお泊りの話であることや、児童にお泊りをしたことがあるか問いかける等、言語的な補足や子どもとのやり取りが非常に重要であると述べる（8）。こうした補助によって、上で紹介した大川（2014）の報告のように、絵本の読み聞かせはリスニング能力の向上に資することがわかっている。

次に読むことの目標はまずアルファベットを発音できるようになること、次いで簡単な語句等の意味がわかるようになることだが、これについては、例えばアレン玉井（2015）や田中（2020）が豊富な活動案を紹介している。ただし英語絵本の読み聞かせとリーディング能力との相関、あるいは英語絵本の読み聞かせとリーディング指導についての研究は蓄積がないため、今後の検証が待たれる。

話すこと（やり取り・発表）についても、田中（2020）が豊富な授業例を紹介している。例えばイソップ童話の *The Hare and the Tortoise* を題材にした授業例では、読み聞かせの前に児童に絵本の内容を尋ねたり、一通り読み終えた後に、Why did Harry (the Hare) take a nap?や Why could Terry (the Tortoise) win the race?等の質問をグループに投げかけ答えさせる等の活動が示されている。上で紹介したスピーキングテストは教師の話す英語を鸚鵡返しに発話する観点から行われていたが、今後、より意味のある文脈でのスピーキング能力測定に関する活動報告が待たれるところであろう。

最後に書くことである。これも田中（2020）を参照しよう。*The Hare and the Tortoise* の読み聞かせ後のワークシートで書く作業を提案している（51）。Hares と Rabbits の特徴を示す語句（larger / smaller, live alone / live in groups 等）をワードボックスに配し、それぞれグループに話し合いをさせながらそれぞれの特徴をワードボックスから選んで書かせるアクティビティである。ただし、英語絵本の読み聞かせにおけるライティングの実践報告も今後待たれるところである。

最後に、英語絵本の読み聞かせが児童の情意面にプラスに働くことは多く

の先行研究が示している。また、英語絵本を用いた英語学習に対する児童の動機づけを維持するために必要なのは、児童の発達段階に応じた絵本であることもわかった。松本（2017b）は絵本の読み聞かせが成功するには絵本の選定が大きな鍵を握ると述べていたが、学習指導要領の目標を達成するためには、主な読み手である教師の積極的な介入も等しく重要であることが明らかとなった。小学校で英語が教科化されたことから、より良い英語絵本の読み聞かせ方を研究していく上で、今後の検証報告が待たれるところである。

注

1　本論で取り上げるものも含めて先行研究を列記する。英語絵本の選定基準については、長田（2018）、木原（2018）、松本（2017b）、山崎（2010）等を参照。

2　実践報告については、岩本（2020）、杉本（2010）、松浦・伊東（2012）、吉村他（2017）等を参照。英語絵本の方法論・活用法については大川（2014）、佐々木他（2018）、松本（2016）（2017a）（2020）を参照。

3　関連して、英語絵本読み聞かせと英語力伸長の関連性についての報告には杉本等（2010）もある。学級担任と英語専科教員が小学５年生２クラスで読み聞かせを行い、活動前後に絵本の内容要約のテストを行った結果、学級担任と英語専科教員の読み聞かせは同じように児童のテクスト理解の能力を向上させたことが報告されている。

参考文献

アレン玉井光江. 『小学校英語の教育法：理論と実践』. 東京：大修館書店, 2015. Print.

---. 『小学校英語の文字指導：リテラシー指導の理論と実践』. 東京：東京書籍, 2019. Print.

岩本淳理. 「自分の考えや気持ちを伝え合う力を育む小学校外国語科における授業の創造―英語絵本活用の効果とその可能性を探る―」. 『鳴門教育大学小学校英

語教育センター紀要』11（2020）：51-60. Print.
大川陽子. 「小学校英語活動における英語絵本の活用に関する研究―児童の発達段階に応じた英語絵本の活用―」. 『鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要』5（2014）：31-40. Print.
長田恵理. 「小学校外国語教育における絵本の活用について―絵本の選び方を中心に―」. 『國學院大學人間開発学研究』9（2018）：39-56. Print.
木原美樹子. 「小学校英語教育における絵本の活用について―絵本の選び方を中心に―」. 『中村学園大学・中村学園大宇短期大学部研究紀要』50（2018）：55-62. Print.
佐々木雅子他. 「絵本を活用した小学校英語の授業デザイン：タスクと異文化理解の視点から」. 『秋田英語英文学』59（2018）：1-11. Print.
杉本光穂他. 「英語専科教員および担任による絵本読み聞かせ」. 『小学校英語教育学会紀要』10（2010）：31-36. Print.
田中真紀子. 『絵本で教える英語の読み書き: 小学校で実践したい英語絵本の指導法』. 東京: 研究社, 2020. Print.
畑江美佳. 「小学校外国語活動における「読む」ことへの第一歩としての絵本の活用」. 『融合文化研究』18（2012）：2-13.
バトラー後藤裕子. 『日本の小学校英語を考える：アジアの視点からの検証と提言』. 東京: 三省堂, 2005. Print.
松浦友里、伊東英.「小学校外国語活動における英語絵本の導入効果に関する実践研究」. 『岐阜大学カリキュラム開発研究』29.1（2012）：94-101. Print.
松本由美. 「英語絵本の読み聞かせの身体性と聞き手の理解」. 『玉川大学学術研究所紀要』22（2016）：21-28. Print.
---. 「英語絵本の読み聞かせの身体性と聞き手の理解（2）」. 『玉川大学学術研究所紀要』23（2017a）：7-17. Print.
---. 「小学校英語教育における教材用英語絵本選定基準の試案―絵本リスト作成に向けて―」.『玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要』10（2017b）：7-16. Print.
---. 「小学校英語の絵本の読みあいにおける「場」の生成について―熟達者の読み手の技術としての「場」の生成力―」.『玉川大学学術研究所紀要』26（2020）：33-42. Print.

村野井仁. 『小学校英語教育の基礎知識』. 東京: 大修館書店, 2018. Print.

---. 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』. 東京: 大修館書店, 2006. Print.

村端佳子, 黒木美佐. 「英語の絵本に見られる英語の見方・考え方の一考察」. 『宮崎国際大学教育学部紀要　教育科学論集』7（2020）：32-43. Print.

文部科学省. 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』 <https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1387503.htm>（最終アクセス：2022 年 1 月 25 日）

---. 『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説：外国語活動・外国語編』. 東京: 開隆堂, 2018. Print.

山崎友子. 「英語絵本の選定とその活用: 国際理解教育のための英語絵本の開発研究から」. 『岩手大学英語教育論集』11（2010）：46-55. Print.

吉村美幸他. 「小学校における英語絵本の読み聞かせの研究―担任が無理なく取り組める手法を探る―」. 『福井県教育研究所研究紀要』122（2017）：122-33. Print.

リーパー・すみ子. 『アメリカの小学校では絵本で英語を教えている: 英語が話せない子どものための英語習得プログラム（ガイデッド・リーディング編）』. 東京: 径書房, 2011. Print.

Gilmore, Alex. “A comparison of textbook and authentic interactions.” *ELT Journal* 58 (2004): 363-74. Print.

Krashen, Steven. *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. London: Longman, 1985. Print.

Widdowson, Henry G. “Comment: authenticity and autonomy in ELT.” *ELT Journal* 50 (1996): 67-68. Print.